様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月　８ 日現在

機関番号：３２６９３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2020
課題番号：１６Ｋ１２００７

研究課題名（和文）高度実践看護師の倫理調整能力強化のための継続教育カリキュラムの開発

研究課題名（英文）Learning Program to Develop the CNS' Role of Ethical Coordination.

研究代表者
吉田　みつ子（YOSHIDA, MITSUKO）

日本赤十字看護大学・看護学部・教授

研究者番号：８０３０８２８８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、専門看護師の倫理調整に関する実践力強化のための継続教育プログラムを開発することである。教育プログラムは、専門看護師の倫理調整に関する役割開発の契機となった体験に関する質的記述的研究、専門看護師の倫理調整に関する実践活動・教育ニーズに関する数量的研究、文献検討を元に、ナラティヴ学習に基づく教育プログラムを構築した。本プログラムは、変容学習をもたらし倫理調整役割における新たなパースペクティヴをもたらすことが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日本では専門看護師（Certified Nurse Specialist）は患者・家族の直接的なケアに携わるだけでなく、スタッフの教育、多職種との連携・調整、医療・ケアのシステムの開発等、重要な役割を担う。困難な事象の複雑な状況を解きほぐし、関係者間の価値観の相違や葛藤を明確化し医療の質を高めるための倫理調整は、CNSとして重要な役割であり、総合的で高度な実践力が求められる。本研究は、ますます高まる倫理調整に関する実践力の開発において、CNSが理論的な知識を学習することだけではなく、日々の実践経験を捉え直し、意味づけることによって学ぶことが可能な理論的基盤にたった教育プログラムであると考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop the learning program to brush up the CNS' role of ethical coordination. The learning program was developed based on a qualitative descriptive research on CNS' narratives that led to development of role development in ethical coordination, a quantitative research on CNS’ educational needs, and literature review. This program was ‘Narrative-based Learning Program' which promoted critical reflection. Such reflection was extremely important in transformative learning and was suggested that bring about a new integrative perspective on ethical coordination.

研究分野：看護学

キーワード：看護倫理　ナラティヴ学習　専門看護師　倫理調整　ナラティヴ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

## １．研究開始当初の背景

医療技術の高度化、治療法等選択肢の多様化によって、複雑で困難な事象に対応可能な高度な実践力を備えた看護師に対する期待はますます高まっている。日本では専門看護師（Certified Nurse Specialist、以後 CNS と表記）は患者・家族の直接的なケアに携わるだけでなく、スタッフの教育、多職種との連携・調整、医療・ケアのシステムの開発等、重要な役割を担う存在である。対応の難しい事象には、個別、固有の文脈を踏まえた患者・家族、医療従事者の価値観、背景にある社会文化等が深く絡み合う。複雑な状況を解きほぐし、関係者間の価値観の相違や葛藤を明確化し、医療の質を高めるための倫理調整は CNS として重要な役割である。倫理調整役割の遂行には、総合的で高度な実践力が求められる。米国では高度実践看護師が担う倫理的意思決定支援に関わるコアコンピテンシーと発達段階モデルが示されている。日本においては米国のモデルと類似の 3 段階が示されている。すなわち、倫理的な課題を見極めスタッフの役割モデルとなりスタッフに働きかける段階、組織内外で生じる倫理的葛藤を予測的にかかわり組織風土を作る段階、社会的提言やガイドライン作成にかかわる段階が設定されている。しかしながら、資格取得後は継続的な教育プログラムの基準は示されておらず、個人が自助努力を重ねている状況である。CNS の実践力全体の向上においても、倫理調整に関する実践力の実態、学習ニーズを明らかにし、継続教育プログラムを検討することが課題である。

## ２．研究の目的

本研究は、専門看護師の倫理調整に関する実践力強化のための継続教育プログラムを開発することである。

## ３．研究の方法

１）専門看護師が取り扱う倫理調整困難事例の特徴、施設内での倫理調整に対して求められる役割・能力と大学院教育・継続教育における課題について、面接調査を実施する。
２）日本の専門看護師の倫理調整遂行力・継続教育に対するニーズについて、質問紙調査を実施する。
３）欧米 Doctor of Nursing Practice（DNP）レベルの倫理教育カリキュラムや実践知に関する教育の理論的基盤を検討する。
４）１）２）３）をもとに、教育プログラム（理論的基盤・内容・方法）を作成する。
５)教育プログラムを試行、評価し、高度実践看護師の倫理調整継続教育プログラムを構築する。

## ４．研究成果

### １）専門看護師の倫理調整に関する役割開発の契機となった経験

専門看護師の倫理調整に関する役割開発を促進するために、どのような支援やアプローチが可能か示唆を得るために、倫理調整に関する役割開発の契機となった経験を明らかにした。CNS 9 名にナラティヴ・アプローチに基づくインタビュー調査を行った。CNS らのナラティヴから 4 つのテーマ、1）相手の本当の声に耳を傾け続け、手だてを尽くす経験、2）今、ここでの自分の判断と行為に全力でかける経験、3）自分の存在・価値観が患者やスタッフにもたらす影響を自問する経験、4）組織・職種間の価値観の違いを超えようと模索する経験が明らかになった。出来事の語り方の特徴から役割開発の契機となった経験は、1）CNS の予想に反する転機がおとずれ、急転的に変化する、2）役割開発の契機は CNS が構築してきた医師・他職種との関係性の構築やシステムづくりに関連する、3）倫理調整役割を比喩的に表現し、自らの言葉で表現する、という特徴があることが明らかになった。

＜上記に関する学会発表および学会誌発表論文＞
吉田みつ子、専門看護師の倫理調整に関する実践力の発達過程における経験―資格取得 5 年～10 年の CNS に焦点を当てて、日本看護科学学会第 38 回学術集会、2018
吉田みつ子、専門看護師の倫理調整に関する役割開発の契機となった経験、日本看護倫理学会誌 11 巻 1 号、2019、20-29、DOI https://doi.org/10.32275/jjne.11.1_20

### ２）専門看護師の倫理調整遂行力・継続教育に対するニーズ

CNS の倫理調整能力強化のための継続教育プログラム開発をめざし、CNS の倫理調整に関する継続学習ニーズを明らかにすることを目的とした質問書調査を実施した。面接調査および先行研究を元に倫理調整に関する継続した教育ニーズ：学習内容（55 項目）、学習方法（9 項目）、個人特性について独自に調査用紙を作成。調査対象者はがん看護 CNS、慢性疾患看護 CNS、急性・

重症患者看護 CNS で日本看護協会登録データベース登録・公開者 975 名であった。データ収集は 2018 年 2 月末～2018 年 4 月中旬に行った。分析は IBM SPSS STATISTICS 25 を用い、属性による比較には t 検定、一元配置分散分析を用いた。

（1） 回答者の背景

422 名より回答を得た（回収率 43.3%）。平均年齢 43.6 歳、看護職通算平均年数 20.1 年、CNS 認定後平均年数 5.4 年であり、管理職経験者は 119 名(28.5%)であった。所属先は 379 名(89.8%)が病院であり、297 名（71.2%）が職場内にスーパービジョンを受けることのできる CNS はいないと回答した。

（2）学習ニーズの高い項目

継続教育が必要と回答した平均得点が高い内容は「看護スタッフに対する倫理的実践のためのアプローチ方法について（M=4.61)」「組織や上司に対する倫理的実践のためのアプローチ方法について（M=4.59)」「倫理カンファレンスの運営・ファシリテーション技法について（M=4.58)」であった。

（3）属性により差がみられた学習ニーズ

CNS 取得後の年数を 5 年未満、5～10 年未満、10 年以上の 3 群に分けて比較したところ、「リスクマネージメント（医療事故を含む）に関する知識」に関して、5 年未満 M= 3.96、5～10 年未満 M=4.16、10 年以上 M=4.15 であり、5 年未満と 5～10 年未満の 2 群間に有意な差がみられた。

（4）学習方法について

スーパービジョンを受けることへのニーズが最も高く（M=4.38)。次いで事例検討会への参加（M=4.37）であった。事例検討会への参加については、CNS 取得 5 年未満 M=4.46、5～10 年未満 M=4.36、10 年以上 M=4.11 であり、5 年未満と 10 年以上の 2 群間にニーズに有意な差が認められ($p<0.05$)、5～10 年未満と 10 年以上の 2 群間にも有意な差が認められた($p<0.05$)。対面式講義の受講については、5 年未満 M=4.00、5～10 年未満 M=3.93、10 年以上 M=3.70 であり、5 年未満と 10 年以上の 2 群間に有意な差が認められた($p<0.01$)。サポートグループへの参加については、5 年未満 M=4.04、5～10 年未満 M=3.93、10 年以上 M=3.61 であり、5 年未満と 10 年以上の 2 群間（$p<0.01$)、5～10 年未満と 10 年以上の 2 群間（$p<0.05$）に有意な差が認められた。

以上により、倫理的実践のために組織に働きかけるアプローチ、調整のためのファシリテーション技術など、実践的な学習内容が求められている傾向がうかがわれた。これらは大学院等では学ぶには限界もあり、しかし、実践の中で実際にどのようにしたらよいかと課題の大きい非常に重要な学習内容であると考えられた。CNS 経験 10 年以上の CNS は、5 年未満の CNS と比較し、事例検討会やピアサポートグループのようなピア同士の学びへのニーズは低く、むしろ、スーパーバイズを活用するなど、CNS 経験年数によるニーズを踏まえ、自己研鑽の方法、継続教育について検討していく必要が示唆された。

＜上記に関する学会発表＞

田中結美、吉田みつ子、岩崎多津代、笠谷美保、二宮由紀恵、高山良子、田代真理、徳岡良恵、中滉子、根岸恵、細田志衣、吉田こずえ、吉田智美、渡壁晃子、「みんなで考えよう！がん看護専門看護師が行う倫理調整の実践と課題」～倫理調整を行なううえでの「障壁」と「能力向上にポジティブに影響した要因」とは～、第 33 回 日本がん看護学会学術集会、2019

吉田みつ子、がん専門看護師の倫理調整に関する継続教育ニーズ、第 33 回日本がん看護学会学術集会、2019

**3）ナラティヴ学習に基づく専門看護師の倫理調整役割開発プログラムの活用可能性**

1）2）の調査結果、および文献検討をもとに、CNS の倫理調整役割開発プログラムの理論的基盤、プログラム内容、運営方法、教育効果を総合的に検討し、専門看護師の倫理調整に関する継続教育プログラムにおけるナラティヴ学習の妥当性について明らかにした。

（1）プログラムの理論的基盤の検討

倫理調整に関する実践力の開発には、明確な答えや正解のない事象へのかかわり、実践の意味を振り返り、次に生かすような学び方が重要であり、理論的な知識を学習することだけではなく、CNS が日々の実践経験を捉え直し意味づけることによって、学ぶことが可能な実践的な知識である。具体的な経験とリフレクションを通じた学習は経験学習と呼ばれ、経験学習において「物語を語ることは、特に危機的なあるいは重大な出来事に関係する保健専門職の役割を反省し、維持し、洗練することに役立つ」といわれている。特に、グループでの対話を用いた経験学習はナラティヴ学習と呼ばれ、「物語を紡ぐ力、あるいは物語を変えていく力を身に着けることが、自分自身を成長させ、自分の周囲にある社会を変革していくことにつながっていく」。そこで CNS の倫理調整役割開発のためのアプローチとして、ナラティヴ学習に基づくプログラムを構成した。

（2）プログラム内容・方法

ナラティヴ学習の理論的基盤に基づき、聞くこと、語ること、対話することによって、CNS が自己の経験を意味づけ、倫理調整役割獲得の契機を得ることをねらいとするプログラムを作成した。プログラムは 5 セッション構成とし、1～4 回のセッションは「先輩 CNS の経験を聞く」

「自分の経験を語る」「メンバー、先輩 CNS と対話する」からなる。5 回目セッションはメンバー同士でプログラム全体の振り返りとした。１～4 回のセッションでは、組織経営におけるナラティヴを取り入れた社員教育手法を参考に、5～15 年の CNS 経験を有する先輩 CNS より、新人 CNS の頃の失敗や教訓を得た経験などを聞くことを組み入れた。

（３）プログラム参加者

CNS 資格取得後 2～4 年目、倫理調整役割に課題を感じている人、全 5 回のプログラムへの参加の意思があることを要件に、10 名程度を募集し、４施設から 5 名が応募した。

（４）データ収集方法

ナラティヴ学習に基づく専門看護師の倫理調整役割開発プログラム参加者の、プログラム中の第 1 回～5 回のセッションにおけるグループでの対話内容をデータとした。加えて研究参加者の基本属性（専門分野、年齢、看護師・CNS 経験年数、職位、プログラム参加動機等）、第 1 回～5 回のセッション終了毎の参加者の感想（自由記載）を収集した。第 1 回～5 回のセッションのグループ対話は IC レコーダーに録音した。

（５）プログラムの試行・データ収集期間

2019 年 10 月～12 月に 5 回のセッションを実施し、データを収集した。

（６）結果・考察

プログラムへの参加は、＜自分の実践や考えを安心して語り、聞くことが出来る＞＜先輩も同じような経験をしてきたことに安堵し、悩んでいるのは自分だけではないと勇気づけられる＞と自己肯定感を高めていた。さらに＜先輩 CNS の経験を自分に置き換えて考え、とらわれていた自分に気づく＞ことが促され、前提や価値観の批判的な振り返りがなされたと示唆された。このような振り返りは、変容学習において非常に重要な段階であり、＜相手の視点に合わせる柔軟性とぶれない思いをもって、看護の質をあげることが自分に求められている役割とハッとする＞という倫理調整における新たなパースペクティヴをもたらすことが示唆された。

＜上記に関する学会誌発表論文＞

吉田みつ子、ナラティヴ学習に基づく専門看護師の倫理調整役割開発プログラムの活用可能性、日本看護倫理学会、14 巻 1 号、2022、掲載予定

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>吉田みつ子 | ４．巻<br>11(1) |
| ２．論文標題<br>専門看護師の倫理調整に関する役割開発の契機となった経験 | ５．発行年<br>2019年 |
| ３．雑誌名<br>日本看護倫理学会誌 | ６．最初と最後の頁<br>20-29 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.32275/jjne.11.1_20 | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>吉田みつ子 | ４．巻<br>14号 |
| ２．論文標題<br>ナラティヴ学習に基づく専門看護師の倫理調整役割開発プログラムの活用可能性. | ５．発行年<br>2022年 |
| ３．雑誌名<br>日本看護倫理学会誌. | ６．最初と最後の頁<br>ー |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>吉田みつ子 |
| ２．発表標題<br>専門看護師の倫理調整に関する実践力の発達過程における経験ー資格取得5～10年のＣＮＳに焦点を当てて |
| ３．学会等名<br>第38回日本看護科学学会学術集会 |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>吉田みつ子 |
| ２．発表標題<br>がん専門看護師の倫理調整に関する継続教育ニーズ |
| ３．学会等名<br>第33回日本がん看護学会学術集会 |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>田中結美、吉田みつ子、岩崎多津代、笠谷美保、二宮由紀恵、高山良子、田代真理、徳岡良恵、 中滉子、根岸恵、細田志衣、吉田こずえ、吉田智美、渡壁晃子 |
| ２．発表標題<br>「みんなで考えよう！が ん看護専門看護師が行う倫理調整の実践と課題」～倫理調整を行なううえでの「障壁」と「能 力向上にポジティブに影響した要因」とは～ |
| ３．学会等名<br>第33回 日本がん看護学会学術集会 |
| ４．発表年<br>2018年 |

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---|---|